ResearchGate

See discussions, stats, and author profiles for this publication at: https://www.researchgate.net/publication/280728719

□□□□□□(22)

Article · January 2013

CITATIONS
0

READS
74

1 author:

Naoto Higuchi
The University of Tokushima
112 PUBLICATIONS **74** CITATIONS

SEE PROFILE

Some of the authors of this publication are also working on these related projects:

Project Nativism and the extreme right in Japan View project

Project Occupational status of migrants in Japan View project

All content following this page was uploaded by Naoto Higuchi on 06 August 2015.

The user has requested enhancement of the downloaded file.

在特会の論理（２２）

――「日の丸をじいちゃんが掲げた」Ｖ氏の場合――

樋口直人

徳島大学総合科学部

Logics of Zaitokukai Activists (22)

The Case of Mr. V

HIGUCHI Naoto
University of Tokushima

１．経緯

本稿は、2011年12月4日に在日特権を許さない市民の会（在特会）の活動家であるV氏（40代男性）に対して実施した聞き取りを、意味が伝わりやすいように適宜並べ替えて再構成したものである[1]。彼は、2010年に在特会に入会し、すぐに支部運営となってさまざまな行事を組織する側となった。以下では、V氏の言葉をそのまま用いて活動家としての経歴をたどっていきたい。

２．政治に対する関心

最初に関心を持つっていうか、だいたい中学くらい。だいたい社会とかで政治とかを、仕組みとかを大きく学んでくる時期ですよね。で、うちはじいちゃんがいたんで、毎日、新聞読んでたんで、「お前も読め、中学（生）になったんだから」となったんで。中学（生）だからまだ理解できない部分って多いわけですよね。まだ勉強したり社会でわからんところを聞いたりしながら。漫画が好きだったけど、7 時くらいニュース見ろとか、社会の流れとか仕組みとか、それくらいで教えてもらったというか。自民党があり、なになに政党がありとか、参議院・衆議院があって、とかいうような具体的な話とか。

まだ僕らが小さい頃は、祭日には日の丸をじいちゃんが掲げたりとか。でも、中学になる頃にはもう掲げてなかったけど、幼稚園とか小学校低学年の時には家で日の丸掲げたりとかいうくらいきちっとして。で、政治に興味を持つというか、社会人としての最低（のことを）知らないかんということで、ニュースは見なさい、毎日、新聞読みなさいとか。わからんところは聞いたらちゃんと教えてくれるし。まあ一般人というか、普通の人と同じくらいのレベルというか、ですね。

（選挙権を）初めて持った時は、どこに入れようかというのは新聞とか読みました。行ったこともないし。多分、地方選挙かなんかだったと思うんですよね。市議会選挙かなんかで。当然、選挙広報みたいなのが来ますんで、誰に入れようかと。（選挙には）ほぼ行きます。日曜日行けないときは期日前投票で。一応どこに入れるというので入れているというか。行かないって言えば、今でも怒られますんで。「行け」って。

地方議会は、昔はやっぱり田舎とかだったら地縁血縁とかあるじゃないですか。知り合いとか、うちのお

---

[1] 徳島市南常三島町 1-1　徳島大学総合科学部（higuchinaoto@yahoo.co.jp）。これまでのまとめとして、樋口（2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2012f, 2012g, 2012h, 2012i, 2013a, 2013b）を参照。これらはまとめて、樋口（2014）の資料編として位置づけられる。本稿も含む一連のまとめでは、聞き取りの中で発せられた差別的な言葉や見方をそのまま掲載している。資料としての意味を損ねないゆえのことであるが、それが苦渋の選択であることはご理解いただきたい。

じさんが立ったから入れてくれとか、あるから。党派とか公約とかあまり関係なしに無条件で入れなきゃいけないな、というのが昔はあったから「しゃあないね」というのはあるし。会社がここを推したりとかあるんですよ、組合とかで。だから入れてくれとはいえないから、推してますとかなれば必然的に入れなきゃいけないというところで、安易に選んでいた部分が正直あります。

もともと自民党ですね、入れるとしたら。それ以外に入れてたのは、組合とか地方選挙の地縁血縁があるから入れてやってくれと言われれば、という感じですね。基本は自民ですね。うちのじいちゃん自体が自民党が好きだったんで、昔の話からいうと「自民党に入れとけば」というような考え方ですよね。安定政権を望むというか。

途中で、こういうの（在特会関連のことがら）に興味を持ち出してからは、地方選挙でも政党とかそういうので選んで、という風には変わりました。いくら地縁血縁といっても…。

３．外国人との接点

高校の先生がカナダの先生で、英語の授業は、というくらいの接点です。（学生時代に）あとは思いつくのは特になしですね。外国人と初めての接点は、仕事をしだしてから当然外国の人とかいますんで――アルバイトとかで外国人来たりするんですよ。近くの大学とかは交換留学生がいるんで、韓国と姉妹都市で。韓国から来て。何ヶ月間かアルバイトしたりするんですよ。で、政治の話は当然しないけど、日本語ができるんですよね。英語と母国語ができるくらいで、まじめに働いてくれて。それくらいの接点ですね。（活動に対する影響は）関係ないですね。

４．活動につながるきっかけ

元々ですね、家の近くに航空自衛隊の基地があるので飛行機が好きだったので。小さい頃から航空祭っていって中に入れてもらって戦闘機が飛んでというのを見てたので、元々保守的というか自衛隊には容認的な土地柄でもあるんで。それで世界の軍事常識みたいなのを知ったら、韓国と北朝鮮という２つの国があってとか、前の（戦争）体験の話とかいう部分で、（戦後教育に）疑問は昔から持ってたのはあるんです。じいちゃんとかから聞いた話とかと大分違うなと。で、うちの母も自分のじいちゃんは植民地――朝鮮半島のときに農園とか１つ持ってたんで、向こうに行っていたという話を母に聞きながら、なんか聞いているような話と大分違うなというイメージはありました。そんなひどいことなんかしてないのに、という感じのイメージもありましたし。違うなっていうのが――向こうの国に対してのイメージが。

前から結構『SAPIO』とか読んでたんで。拉致の問題とかもかなり前から落合信彦とかあの人たちが書いてたので、横田めぐみさんの話とかは拉致が発覚する前から知ってたんで。ミリタリー的なものが好きだったので、当然拉致はあっちの国だろうねという話があったけど、確証がなかったような時代で。その後拉致が発覚して、「ああやっぱりね」というか。

ちょうど時期的に高校ぐらいの時に、中国の天安門事件とかベルリンの壁とかが崩壊してたんで。国際的なことに興味があるというか、一番高校生ぐらいの時に社会の仕組みが変わっていくというか、世界が変わるので、世界的な情勢に興味が出てきたんですね。その中で拉致の話も出てきたので、横田めぐみさんの話とか。高校時代から学生時代、就職してぐらいまでですよね。あの人（落合信彦）の本をずっと読んでいたので。ただあれだけの数が拉致されているというのは、まだわからなかった時代ですし。

（「外国人問題」に対する関心は）当然その、拉致が発覚する前からそうです。朝鮮総連というのがあるのを知って、その時代に、朝鮮人のそういう組織や団体とかがあって、とかいうのもその時の本にも書いてあったし。拉致が発覚した後も朝鮮総連が残ってるというのも･･･漠然とそれは疑問に思ってたんですよね。何でなくならないんだろうな、とか。

一番決定的だったのは、ミサイル発射をやったじゃないですか、北朝鮮が。二千何年ですよね[2]。日本が打ち落とすとか打ち落とさないとかやってた時から。あの時に、Youtube でいろいろ見てたんですよ。ただその時もたまたま在特会が朝鮮問題でヒットして、その動画を見たんですよ。それで、この会の存在を初めて知ったというか。Youtube で調べたら、（動画画面の）横にいろいろ出てくるじゃないですか、関連の（動画が）。そうしたらたまたまヒットしたんで、たまに見るようになりました。最初は見た時は東京とかでやって

[2] 2009 年 4 月の実験を指すと思われる。

たんで、向こうの方でやってるんだな、としか認識はなくて。いろいろ調べてみたら、地元とかやってるんだね。参加までは（至ら）なかったですね。

元々、もう少し『SAPIO』とかよんで知識的なものがあって、プラスアルファで補完するものとしての動画という位置づけですよね。一つ思うのは、やっぱり「おかしいな」と思います。公園を不正に使われても何も言えないって、何かおかしいなって[3]。

５．参加へ

（動画を最初に見たのは）北朝鮮のミサイル発射があった後くらいですよね。（実際に参加したのは、それから時間が）経ってます。興味を持ちつつ動画を見て。で、京都の朝鮮学校の問題とかあったじゃないですか。（2010 年）８月に逮捕されたじゃないですか。あの時には、自分は納得がいかんなと思ったんですよ。学校[4]を不正に使用された挙句に、逮捕、書類送検、向こうは罰金だけと。ちょっとこれはおかしいなというので、それが 8 月に逮捕があって、9 月に会見があったんですよね。

（参加を決意したのは）逮捕が大きなきっかけですよね。あまりにもやっぱりこう、理不尽だなって。インターネットで見たら、9 月 20 日に街宣が地元であるっていうので、それで初めて参加した。（会員になる）前です。参加してみてからなろうと思って。どんなもんだろうと思って。その時は朝鮮学校の問題だったんですよ、無償化かなんかの。で、拉致の問題も当然あって。その時、一緒に支部長がいて話して、いろいろ。で、入るきっかけになったんですけど。

当時は多分、在特会自体、朝鮮問題メインでやってたから――街宣も。多分他の問題でも朝鮮問題でしょうから。だって動画をみると朝鮮問題がメインで、たまに日教組をやったりとか、あとカルデロン問題とかもやってましたよね。あれぐらいで、今みたいに尖閣だなんだってまだ言っていなかった時代だったので。

（参加に）抵抗がありました。（直接行動には）一切そういうの出たこともないです。まずどんな人が来るんだろうか、どんなんだろうと思って。1 時間前くらいに行って、駅前の銅像の前でずっと見て、「ああ動画でみた人だ」と思って。で、大丈夫そうかなと思って。動画でみると――街宣自体は前から見てたから、流れ的なものは大体わかるので、「ああこういう感じなんだな」と思って。その後の打ち上げというか、やる時には動画とかないから、いろいろ話をしたんです。その時に、「ああやっぱりなるほどなるほど」という共感とか、いろいろなものがあったので。

それでも、入る（在特会に入会する）まで若干ちょっとまだ時間があったんですよ。直後に入ったわけではなくて、その後支部長と何回か話した後に、入ってと言われたと思うんですけど。（街宣参加から入会まで）1 ヶ月ないぐらいですよ。（会員になってから）すぐ（支部）運営になったんですけど。

はっきり言うと、在特会の活動とかに自分が参加しても、自分自身じゃなくてみんなに迷惑がかからないか、とか自分でも務まるのかなとかという部分がありました。経験もないし、ノウハウも当然ないし。みんなに迷惑かからんように、自分のスキルで何ができるんだろうって。結構みんなマイクでガンガンしゃべれるじゃないですか。会社の朝礼とかああいう時でしゃべったりするのは当然あるけど、それ以外でマイク持ってしゃべる経験なんてまずないんで。動画でみるとみんなうまくしゃべってるし、果たして自分にそんなことができるんだろうか、というのが一つありましたね。（活動頻度は）1 ヶ月 1 回ぐらいですかね。

６．外国人参政権について

外国人参政権は、『SAPIO』とかにも確か書いてあったと思うので、多少の関心はありました。でも活動を始めてからの方がより一層、理解も深めたし。危険度というのも認知しました。（それまでは）こういうのがあるなっていうくらい、流れは。そこまで身近には思ってなかったですね。参加するまでは流してたと思います。今の日本人も流してると思いますし。

７．尖閣よりも身近な問題

尖閣は尖閣でまた（問題が）ありますけど、あれってやっぱり沖縄の遠方海上だから、台湾寄りのまだ遥

[3] これは後に言及される、京都朝鮮学校に対する嫌がらせのことを指している。嫌がらせを実行したチーム関西は、「学校が公園を不正に使用している」（八木 2012）として正門前で長時間にわたって街宣した。それに加えて公園のスピーカーを無断で撤去するなどしたため、関係者が逮捕されている（安田 2012）。

[4] 「公園」の誤り。

かかなたで･･･。日本人の感覚として中国人の云々と意識するのは、やはり身近なレジに中国の人が多くて、居酒屋とか飲み屋さん行って注文取りに来る人が、というので「ああ、向こうの人多いな」という一つの認識が増えたかなと。(身近な問題として) 感じますね。あと、飲み屋さんとか居酒屋とかいっても、向こうの――韓国というより中国の人のアルバイトで結構多いですよね。だからかなりの人達が入って来てるなという印象がありますね。

最初 (活動を) 始めたときは、韓国･朝鮮に強い興味がありましたけど、今は両方ですね。もうほぼ同列ぐらいかなと。近年の１つの移民って、在日韓国･朝鮮人ですよね。ある意味、移民というか不法入国の人もあるんですけど。次に多く入ってきているのが中国人。まあ、フィリピンの人たちもそうなんですけど。で、流入もどんどん続いているような状態だし。あと、コンビニエンスストアに行ったらわかる通り、中国人が、留学生の人達がレジ叩いているわけじゃないですか。大学とかでも多く受け入れているわけだし、彼らは卒業しても帰らない人が多いんですよね。データからいうと６割くらい残るんですよね、日本で。ひどい人は親兄弟とか連れてきて留学してる人達が、統計上あるんで。ここに定住するというか、それはちょっと深刻な問題だなと思っています。

例えば大分の中国人の生活保護の問題とかもありますし[5]。ああいう問題も、やるべきかやらないべきかという問題もあるけど、話の根本からいうといろんな複雑な問題がね、あの件は絡んでて。実際、義理の弟に資産全部おさえられてしまって、生活に困窮するような感じになって、その他問題であって。実際、じゃあその問題を先に解決しないと、あのおばあさん幸せにならんなって思います。だって暴力受けて､お金から通帳から全部取り上げられて。で、195 万 (円) くらいあった貯金が 210 円まで減らされて。で、駐車場とか家の賃貸料で 70 万とか 80 万 (円) あったのを全部口座窓口移し変えられて、出鱈目やられていて。今､確かに困ってるんだろうな、とは思いましたよ。でも生活保護やって、じゃあその義理の弟の排除しない限り、お金も取り上げられるんじゃないかとか、暴力受けるんじゃないかと思って。その裁判は本末転倒だなと。

まずはおばあちゃんのことを考えるんだったら、生活保護の裁判を起こす前に、おばあちゃんの義理の弟を何とかしてあげないと、そのおばあちゃんに幸せは来ないなって思う。それをマスコミとかは、人権報道じゃないけど、外国人にやるやらないとか難しい問題にしてるじゃないですか。憲法 14 条だ 25 条だ、法の下の平等だ､あとなんだ･･･生存権とかやってますけど､それ以前の問題でしょう。記録を見たら――裁判記録とか見たら。

危機感があります。民主党が移民をどれくらい受け入れるだ、こうだと言ってますし。現実問題、中国人の留学生ってすごいんですよね、今日本で。だからとっかかりの在日韓国･朝鮮人の移民問題で日本 (は) 失敗してるわけですよ。甘いから。それを韓国や違う国の人に恩恵という形で生活保護にしろ――あといろんな問題ですよね、社会保障というか――国のお金をどんどん出し続けているのが現状だから。とっかかりが甘いのに、これ以上受け入れてどうなるのか、という危機感がありますね。地元なんですけど、10 年前でだいたい生活保護って外国人って数十人くらいしかもらってなかったのが、今は 4、500 人。どんどんどんどん増える一方なんですよ。今、日本人でも生活保護を受けないと生活が困窮する人が多いのに、日本人ですらあんまりもらえないのに、外国人の枠が増え続けてどうなっちゃうのかなって危機感がありますね。

８．活動を持続させる動機

一つは危機感ですね。やはりこのままだったら大変なことになるな、というのは身近に感じました。市役所とか県庁舎とかいろいろなところに行って担当の人たちと話したりする時に思いました。外国人にこんなに甘いんだ、国が･･･。

自分が特にこの活動を始めて思ったのは、支部長から朝鮮学校の補助金の件をやれって言われて、監査請求とか行政関係をやったんですよ。その時に担当のところに朝鮮問題とかを提起すると嫌がるんです。こういう問題を言いに来る人は誰もいない、かつて一人もいなかったというのです。「こういう問題に手をつけると大変なことになる」と (役所の人が) 言うのですよ。

[5] 中国籍永住者による生活保護申請が却下され、その取り消しを求めて提訴した裁判。大分地裁は、知事が審査請求を却下したことを違法とする一方で(2010年9月30日)、生活保護の権利性自体は棄却する判決 (2010 年 10 月 18 日) を下した (嘴本 2011; 奥貫 2011)。

こういう問題に手をつけると大変なことになるから、やめましょうやめましょう、とやってきた経緯があるというのを直接見聞きすると、大きく考えが…。こんなにも外国人に甘いのかという認識がありました。

直接肌で行政の人たちと意見を聞いたり、意見を発することというのが得られた一番の成果ですね。インターネットで見聞きするよりリアルタイムの運動を感じられたことはすごいですね。あと交渉能力っていうか、今までにないようなスキルがつきますよね。行政がのらりくらりとかわすような、そういう交渉とか。会社でそんなのらりくらりなんかないですものね。答えないんですよ。「うーん」とか「あー」とかしか、朝鮮問題とかそっち系になると、絶対口割らないです。そんな経験は今まで本当なかったです。商談とかいろいろ会社同士で話したりしても、受け答えで返ってくるわけじゃないですか。疑問点とか投げかけたらこうとか。イエスノーですらないんですから。そういうのをどうやってしゃべらせたりしたらいいんだろうか、とか。

今までの経験でないですね。あの、キャッチボールにならないんですよ。本当に異常な空間だなって思います。実際に体感したらわかります。（交渉では）押したり引いたりとか、なだめすかしたりとか、声を荒げたりとか。（そうすると話を）してくれる人もいますし、動画とか持っていけ、止めてくれたら話すとかいう人もいますし、いろいろですね。それは本当に実地で学んでいかないと、個々の生活とかいろいろあるでしょうけど、場を踏まないとわからないですね。この人はどういう人なんだろうかというのがあって。

９．結語に代えて

V氏は、筆者が聞き取りした活動家のなかでも実直そうな雰囲気が強く伝わるタイプだった。また、他の活動家と異なり、自ら経験したことから活動の論拠を示すのも特徴的であった。当初の関心こそ北朝鮮との関連で生まれたが、実際に活動して培われた「危機感」はコンビニエンスストアでアルバイトする留学生など、体感的な移民の増加である。あるいは、行政の姿勢をみて移民が増加した時の受け入れについて懸念を表明するなど、実体験と意識の連関が密な珍しい部類に入るだろう。

彼の実直さの少なくとも一部は、比較的よくみられるような――極端ではない――保守的な拡大家族で育ち、保守的な祖父の影響を受けてきたことによるだろう。祖父は、単に日の丸を掲げるという保守的な姿勢だけでなく、新聞を読むという社会性もV氏にしつけている。投票先も祖父の影響を受けて自民党であり、安定政権を望むという「システム・サポート」的な姿勢（田中 1995, 1996）にとどまっていた。

それが排外主義と接点を持つ要素として、次の2点を挙げることができる。第1は、戦前の状況に対する親族の話により培われた、歴史修正主義的な見方である。身近な親族の話を準拠点として、過去のファシズムや戦争責任を否定するのは、特に珍しいことではない（Dechezelles 2013）。第2に、幼少期の自衛隊体験を挙げることができるだろう。自衛隊に対するポジティブな見方は、軍事・国際情勢への関心を醸成したと思われる。それが青年期に入ると、ベルリンの壁の崩壊といった事件を媒介として、『SAPIO』という落合信彦のような怪しげな「国際情勢」を伝える書き手を抱える右派雑誌の講読へと結びついた。

このうち自衛隊との接点がある者は、必ずしも多数派とはいえないだろうが、これは地域性によるものである。歴史修正主義も親族からの影響であり、インターネットを介して受容したわけではない。つまり、彼が排外主義を受容する素地になったのは、地域や親族を媒介とした第一次的な社会化の過程であり、社会集団から遊離したネット右翼というイメージとは対極にある。筆者が調査した範囲では、こうしたタイプは排外主義運動の活動家のなかで必ずしも多くはない。しかし、地方の保守的な環境のなかで「まっとう」に育ち、その実直さから「疑問」を持って運動に馳せ参じる者がいるから、在特会は多くの都道府県に支部を設けられたとはいえるだろう。これもやはり、社会解体が不安を蔓延させて排外主義運動に結びついたという、俗耳に入りやすい見方を諌める材料の1つとはいいうる[6]。

文献

Dechezelles, Stéphanie, 2013, “Neo-Fascists and

[6] こうした見方の問題点については、樋口（2012f）で論じておいた。

Padans: The Cultural and Sociological Basis of Youth Involvement in Italian Extreme-Right Organizations," Andrea Mammone, Emmanuel Godin and Brian Jenkins eds., *Varieties of Right-Wing Extremism in Europe*, London: Routledge.
嘴本郁，2011，「外国人の生活保護をめぐる大分地裁判決と厚労省通知について」『Migrant's ネット』136 号.
樋口直人，2012a，「在特会の論理(1)～(7)」『徳島大学社会科学研究』25 号.
————，2012b，「在特会の論理(8)～(9)」『徳島大学地域科学研究』1 号.
————，2012c，「『行動する保守』の論理(1)～(3)」『徳島大学地域科学研究』1 号.
————，2012d，「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8 号.
————，2012e，「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45 号.
————，2012f，「排外主義運動のミクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9 号.
————，2012g，「在特会の論理(11)～(14)」『徳島大学地域科学研究』2 号.
————，2012h，「『行動する保守』の論理（5）～(6)」『徳島大学地域科学研究』2 号.
————，2012i，「在特会の論理（15）～(18)」『徳島大学社会科学研究』26 号.
————，2013a，「『行動する保守』の論理(7)」『アジア太平洋研究センター年報』9 号.
————，2013b，「『行動する保守』の論理(8)」『茨城大学地域総合研究所年報』46 号.
————，2014，『日本型排外主義』名古屋大学出版会.
奥貫妃文，2011，「労働法および社会保障法からみる移住者の貧困」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』現代人文社.
田中愛治，1995，「『55 年体制』崩壊とシステムサポートの継続」『レヴァイアサン』17 号.
————，1996，「国民意識における『55 年体制』の変容と崩壊——政党編成崩壊とシステム・サポートの継続と変化」日本政治学会編『年報政治学 55 年体制の崩壊』岩波書店.
八木康洋，2012，「朝鮮学校による京都市勧進橋児童公園不法占拠事件と有志による抗議活動」『国体文化』1060 号.
安田浩一，2012，『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.

（付記）科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。

View publication stats